氣風

牧羊

此間、清國から歸つた友達に久し振りで面會つた。連れて行つて居つた子供が、學齡に達したので、日本の學校へ入學させる爲めに、子供丈け置きに歸つたといふことである。いろ〳〵話しの末、子供の事に就て、次の樣に語つた。

清國では、相當な位置を保つて行くには、召使の樣なものが非常に澤山要る、先ゴックとか、掃除人とか、取次とか、門番とか、ボーイとかといふ風に隨分な家僕が要る。一體に清國人は非常に子供を好む所からして、之等の從僕は、何れも子供の機嫌ばかり取る。子供はよい氣になつて、何んでも乎んでも從僕にもたれかゝる、幾ら此方で注意して、自分のことは自分でするなど云ふ樣に教育しても、陰に廻はつては、おさ之等の從僕の爲めに、破壞される。夫で自分は思つた、小さい時分から、こんな中に育ちて、我儘の氣風を養成されては、成長の後、始終順境でばかり行けばよいが、一旦逆境に立つた場合には、さつぱり意氣地のない人間になるであらふと、そこで、僕は斷然連れて戻つたのであると、

知識を與へるのは、教育の一の手段に過ぎぬ。教育の極點は、人の氣風を作るにある。智識の教育は多少後迄でも後で取返しは幾らでも付く。たゞこの氣風は、早くから教育して置かないと、後日に至つて決して取り返しが付かぬ。前の咄に付いても、孟母三遷の言傳は古いが、其意味は何日までも新らしい。幼時の教育の大切といふことは、つまりこの點にあるのである。支那人には支那人の氣風があり、英國人には英國人の氣風あり、日本人には日本人の氣風がある。又日本人の中にも武士には武士の氣風あり　商人には商人の氣風があるといふのは、皆子供の時から長く長く打ち込まれた結果である、ローマは一日では出來ない。